

Bangladesh・チッタゴン丘陵地帯の少数民族における 学校教育中途退学者及び初等教育非就学者の現状とその要因に関する考察

—クミ民族の事例より—

田中志歩¹・加野芳正²

<要旨>

本校の目的は、 Bangladesh の小規模少数民族クミにおける初等・前期中等教育中退学者及び非就学者の現状を明らかにするとともに、村別、男女別にその要因を分析することである。クミの村では、教育制度が萌芽的に受容されはじめた一方、何らかのことが原因で中途退学や非就学が起きている。本研究ではロワンチョリ郡のクミ村落の中で、バンドルバン県の主要都市であるバンドルバン市内から一番近い距離に位置するA村と、一番遠い距離に位置するB村において、男女別に3～5名からなる4グループでのフォーカス・グループ・インタビュー (FGI) を実施した。その調査結果より、主に本人の就学意欲、父親（あるいは祖父、兄）の子どもへの就学に対する意識、経済的要因から中途退学や非就学が起きていることが明らかになった。

キーワード: Bangladesh、少数民族、非就学、中途退学、フォーカス・グループ・インタビュー

1. 研究目的

小規模少数民族クミは、 Bangladesh 南東部のチッタゴン丘陵地帯のバンドルバン県のロワンチョリ郡、ルマ郡、タンチイ郡並びに、ランガマティ県のピライチョリ郡に暮らしている。人口は約3,000人であり、5世帯～30世帯ほどから成る42の村を形成している (SEHD2017)。宗教は古くはアニミズムを主とする土着信仰や仏教であったが、キリスト教の流入により、現在ではクリスチャンが62.8%と多数を占めるようになってきている。クミは他の少数民族と混在村落を作ることは少なく、稀に同じクミグループである少数民族ムロヤボンとの婚姻等の関係により、村内に複数の民族が暮らしていることもある。現在も焼き畑農業を中心とした農業従事者が9割を占めている。

クミ民族は、チッタゴン丘陵地帯 (Chittagong Hill tracts: CHT) の11の少数民族¹の中でも人口が少ないことや、山頂部付近に村がある地理的要因等から開発から取り残されている。教育支援に関しては最も課題が多いとされており、2008年のCHTDF-UNDP (Chittagong Hill Tracts Development

1 香川大学大学院教育学研究科

2 香川大学教育学部

Facility-United Nations Development Program) の調査報告によると就学率が僅か12%であることが報告されている。バングラデシュの初等教育普及率は97%を達成していることから現在のクミ民族の就学率の低さは明らかである。また、公立小学校は、ロワンチョリ郡に1校(1991年～)、ルマ郡に1校(2018年～)の2村のみに設置されている。そのため、この2村以外の村人らは子どもに教育を受けさせたい場合には、寮が併設されている村外の学校に入れることが必要である。しかし、学費が無料である公立学校に子どもを入れても、寮費や食費などを負担しなければならないため、金銭的な負担が大きく、教育の普及がなかなか進まないとされている。

筆者はこれまでに、ロワンチョリ郡のクミ村落全6村89世帯の世帯主に対する悉皆調査を実施した(田中2018)。調査によって、祖父母世代の就学率が0%、親世代が23.6%、子世代が59%と祖父母世代や親世代と比較して学校教育にアクセスを可能にした人数が増加してきていることが分かった。しかし、現時点においても中途退学や非就学が起きており、悉皆調査では、その原因の背景や詳細を明らかにできていない。

このような問題意識から、本研究には質的研究手法の一つで、属性別の比較がしやすいフォーカス・グループ・インタビュー(以下、FGI)を用いることにした。

具体的には、ロワンチョリ郡のクミ民族に焦点を当て、中途退学や非就学がどのような経緯で起きているのかをバンドルバン県の主要都市であるバンドルバン市内から一番距離が近くクリスチャン人口の多いA村と、バンドルバン市内から一番遠く土着宗教であるクラマー教人口の多いB村において、男女別に3～5名からなる4グループでFGIを実施した。なお、インタビュー対象者は、初等教育及び前期中等教育中退者、及び、非就学者である。

バングラデシュの少数民族における中途退学や非就学の要因を教育の受容者の視点から分析することによって、バングラデシュの教育課題の一つである少数民族に対する教育機会の拡充への新たな視点を提供したい。

2. バングラデシュの中途退学、非就学に関する調査報告

(1) 中途退学に関する調査報告

バングラデシュ国内における中途退学に関するデータは、バングラデシュ教育情報統計局によって報告されている。初等教育レベルでは、2015年の20.4%から2016年には19.2%に低下しており、中等教育レベルにおいても、2015年の40.3%から2016年の38.3%に低下している(The Daily Star 2017)。

また、チッタゴン丘陵地帯に焦点を当てると、CHTDF-UNDPの2001年の調査があり、チッタゴン丘陵地帯における少数民族児童は小学校の早い段階で約65%がドロップアウトしていることが報告されている。その原因は、バングラデシュ独立翌年の1972年から1997年の25年間という長期にわたり、チッタゴン丘陵地帯の少数民族とバングラデシュ政府は紛争状況にあり、他のバングラデシュの地域に比べて教育制度を整備することが困難であったことにある。また、和平協定締結後も山岳地域のため通学が困難であったことや、貧困問題、教員の質の問題に加えて、彼らの母語とは異なるベンガル語での学習や教科書を使用するため内容を理解できず学習への困難さが影響したと考えられている(CHTDF-UNDP2008)。

(2) 初等教育非就学に関する先行研究

1990年の「万人のための教育(Education For All: EFA)」や2000年の「国連ミレニアム宣言(Millennium Development Goals: MDGs)」などを受けて、途上国の初等教育純就学率は1990年の80%から2015年の91%に増加し、非就学状況にある初等教育学齢期の子どもの数は、2000年の1億人か

ら2015年の5,700万人に減少した(United Nations2015)。

しかし、現時点においても残り約10%を占める非就学の状況にある子どもたちが存在し、彼らの学校教育へのアクセスをいかに促進していくかが急務の課題となっている。

その一方で、非就学状況にある子どもをめぐる議論は、国際機関による調査報告や量的研究のようなものはみられるが、それらも教育普及者の視点による現状報告にとどまるものが多く、教育受容者の視点からの考察は未だ少ない。

張(2008)は、中国西南部の辺境地域に位置する非就学率40%のK県における義務教育への就学状況を、アンケートを用いて調査している。その結果、非就学状態を引き起こす原因として、調査地域の住民にとって教育が社会・経済的地位を達成する手段であることに対する認識が欠けている点を指摘している。また、2009年には中国の中でも貧困地域である西部地域と北西地域の4県における比較研究を実施し、非就学や中途退学の発生要因は貧困といった客観的な原因と、子ども自身の学校へ通いたくないという主観的な原因の二つがあることを明らかにしている。しかし、これらの研究も質問紙調査を基本としており、子ども自身は何が原因となって学校へ通いたくなくなったのかまでは言及されていない。

また、本調査の対象であるクミ民族に関する非就学のデータは、研究目的で示したように2008年の時点で88%となっており、バングラデシュの初等教育就学率が97%であることを考えると極めて高い数値であることが分かる(CHTDF-UNDP2008)。

以上、初等教育における中途退学並びに非就学に関する先行研究の検討を行った。このように、中途退学や非就学はその問題の重要性が指摘されていながらも、その実態に関しては未だ明らかにされていない点が多く、教育受容者の視点に立った研究が強く望まれていることが分かる。

3. 調査

(1) 調査概要

筆者は、2018年8月1日から9月1日までの31日間にわたってバングラデシュに滞在し、そのうちの5日間を使い、バンドルバン県ロワンチョリ郡にあるA村、B村の2つのクミ村落において3～4人で成る男女別のグループ(①A村男子グループ、②A村女子グループ、③B村男子グループ、④B村女子グループ)に対してFGIを行った。表1にインタビュー対象者の年齢や就学経験の有無等の概要をまとめた。所要時間は1グループにつき30分～1時間、インタビュー対象者は各村の村長に依頼した。

被調査者の使用言語は、ベンガル語、クミ語であったため、FGIの際は主にベンガル語を使用し補助的にクミ語を使用した。なお、対象者にはインタビュー開始前にFGIの目的、方法、名前が外部に出ることはないこと、問い合わせ先を説明し、参加協力の承諾を得た。

表1：インタビュー対象者の概要

	名前	年齢	宗教	結婚	就学経験など
A村男子	Aさん	25歳	クリスチャン	○	就学経験なし。焼き畑農業従事者。
	Bさん	25歳	クリスチャン	○	ルマ公立中学校卒業後焼き畑農業。結婚後、高校に入学。
	Cさん	19歳	仏教	×	5年生まで就学。焼き畑農業従事者。
	Dさん	23歳	クリスチャン	○	チッタゴン市内のミッションナリー系学校で8年生まで就学。焼き畑農業従事者。Paraschoolの教員。
A村女子	Eさん	29歳	クリスチャン	○	村(ルマ郡)の寺子屋で3年生まで就学。焼き畑農業従事者。
	Fさん	不明	クリスチャン	○	就学経験なし。焼き畑農業従事者。
	Gさん	24歳	クリスチャン	○	村(タンチィ郡)の小学校で5年生まで就学。焼き畑農業従事者。
B村男子	Hさん	15歳	クラマー	×	入学したが初日で退学しているため就学経験なし。焼き畑農業従事者。
	Iさん	15歳	クラマー	×	ロワンチョリ郡の小学校で3年生まで就学。焼き畑農業従事者。
	Jさん	23歳	クラマー	○	ロワンチョリ郡の小学校で4年生まで就学。焼き畑農業従事者。
	Kさん	15歳	クリスチャン	×	ロワンチョリ郡の小学校で1年生まで就学。焼き畑農業従事者。
B村女子	Lさん	19歳	クラマー	×	ランガマティ県で中学校10年生まで就学。家事手伝い、焼き畑農業従事者。
	Mさん	15歳	クラマー	×	ロワンチョリ郡の小学校で4年生まで就学。家事手伝い、焼き畑農業従事者。
	Nさん	18歳	クラマー	×	就学経験なし。家事手伝い、焼き畑農業従事者。

(2) 調査対象地域の概要

調査対象地はバングラデシュ・チッタゴン丘陵地帯・バンドルバン県・ロワンチョリ郡・A村並びに、B村である。バンドルバン県の主要都市であるバンドルバン市までは、バングラデシュの首都ダッカから夜行バスで約10時間の距離に位置する(図1)。最新の人口データは1991年と古いが、ベンガル人120,236人、少数民族110,333人であり、少数民族が人口の48.57%を占めている。その少数民族の中ではマルマ民族が59,288人と人口の半数以上を占めている²。調査対象であるクミ民族は、少数民族の中でも特に人口が少ないことに加えて、山頂付近に暮らしているため地形的要因からも、最も教育支援が行き届いていない民族である。ここでA村、B村の教育事情について、簡単に説明する。

① A村

バンドルバン県の主要市であるバンドルバン市からバスで1時間半の後、徒歩30分を要する。現在は18世帯が暮らしているが、そのうちの2世帯ではインタビュー調査を実施しなかった。その理由は、1世帯は、ボン民族世帯で、村に家はあるがバンドルバン市内に移住しているため、もう1世帯は、ムロ民族の高齢者が1人暮らしをしていたためである。16世帯中クリスチャン世

帯が11、仏教世帯が5であり、クリスチャン世帯が多い。現金収入を得ている世帯は2世帯のみで、1世帯は教員、もう1世帯は牧師である。他の世帯はすべて焼き畑農業に依拠している。

A村は、ロワンチョリ郡におけるクミ民族の6つの村のうちバンドルバン市内から一番近く、村から主要道路への距離も一番近い。しかし、ロワンチョリ郡にあるクミ民族の村6村のうち1番教育水準が高いわけではなく、公立小学校は設置されていない。この村に学校が始めて設置されたのは2010年であり、この小学校は村人たちの手で作られたノンフォーマル学校である(田中・加野2018)。また、UNICEFとCHTDFが合同で進めているpara-school(パラ・スクール:村の学校)プロジェクト³があり、就学前の3～5歳の子どもが読み書きを学ぶ授業が村人の家で金曜日を除く午前中の2時間ほどで実施されている。

②B村

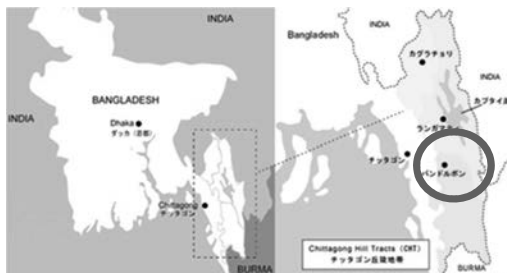
ロンタン村から徒歩約7時間の山岳道に位置している。また、バンドルバン市内からサング川をスピードボートで3時間あるいは、乗り継ぎボートで6時間の後、徒歩30分で行くことも可能である。ロワンチョリ郡にあるクミ民族の村の中で一番バンドルバン市内から離れている村である。B村の18世帯中、クリスチャン世帯が6、クラマー世帯が9、仏教世帯が3であり、クラマー世帯が多い。現金収入を得ている世帯は1世帯であり、教師である。他の世帯はすべて焼き畑農業に依拠している。

この村には、カリタスというミッションリー系のNGOからトリプラ民族の教師が派遣されており、小学校1年生から3年生に当たる年齢の子どもが主にベンガル語の読み書きと算数を学んでいる。授業が行われるのはこのトリプラ民族の家であり、午前中の2時間ほどの実施である。また、ロンタン村と同様にpara-schoolプロジェクトも実施されている。

(3) 調査方法と調査内容

非就学者及び中退者の語りを収集するため、本研究においてはFGIを調査方法として用いた。FGIを用いた先行研究としては、松井・七木田(2015)の、母親と父親をペアマッチにして行った、障害のある子どもをもつ親の子育て意識に関する調査、もう一つは、岩山(2017)の、ウガンダにおける障害児を養育する保護者を、重度障害グループと軽度障害グループの2グループに分け、双方のニーズの相違を検討した調査などがある。この2例のように、FGIは同じ背景を持つ当事者グループに対して質問をすることで、参加者間の相互作用が生じ、個別のインタビューに比べて豊富なデータの収集が可能となる場合がある。さらに、グループ間の比較が可能であるため、男女や地

図1：バンドルバン県の位置



(出所) ジュマ・ネットHP
※丸で囲んだ部分がバンドルバン県

写真1：FGIの様子(新モユ村男子)



(出所) 2018年リュウロン・クミ撮影

域の間で生じる考え、意識等の差異を明らかにするのに適している方法であるといえる。

インタビュー内容は、非就学者に対しては主に、①学校に行きたいと思ったことはあったか、②学校に行きたいと両親に伝えたことはあるか、③その場合両親からどのように言われたのか、の3点であった。また、中途退学者に対しては主に、①中途退学に至った経緯、②中途退学の相談をした際の両親の反応、③就学をやめてからの生活、④学校の楽しかった思い出、の4点であった。インタビューに所要した時間は、A村男子グループが46分、A村女子グループが50分、B村男子グループ58分、B村女子グループ50分であった。なお、インタビューの内容はICレコーダーで録音した。

(4) 分析方法

安梅 (2010) や土屋 (2016) を参考にFGIの分析手順に沿って行った。まず、インタビューの内容をベンガル語・クミ語から日本語に翻訳したものを文字に起こして逐語録を作成した。次に、FGIの質問ごとに重要アイテム(意味のある発言)を抽出した。そして、二次分析として類似した内容の重要アイテムを分類して、重要カテゴリー(意味のあるカテゴリー)を抽出してラベルをつけた。さらに、村別、男女別でどのような発言傾向があるのかを考え、比較的に分析した。

4. 結果と考察

FGIの分析の結果、「本人の就学意欲の低下」「父親(祖父)の就学に対する低い意識」「経済的要因」の3つが重要カテゴリーとして分類された。4つのグループの特徴を重要カテゴリー別に表したものが下記のとおりである(表2)。

以下、各項目において、具体的な語りも挙げながら考察する。

(1) 本人の就学意欲の低下

(重要アイテム数25：A村(男)0・(女)1、B村(男)19・(女)5)

表2：非就学・中途退学が引き起こされる要因の複合分析

	重要アイテム	A村(男)	A村(女)	B村(男)	B村(女)
就学意欲の低下	教科学習でのつまづき		△	◎	△
	教師等への恐れ			◎	
	学校生活や寮生活との不適応			○	△
	生活実態に合わないカリキュラム			◎	
	落第に対する恥ずかしさ				△
父(祖父)の就学に対する低い意識	不就学・中途退学を容認する姿勢	◎	◎	◎	○
	就学・再就学への不理解		○		○
	就学よりも仕事や家事を重視		◎	◎	○
経済的要因	家庭のことを考えて	◎	○		△
	ほかの兄弟のことを考えて	◎	○		△
	親の死	△			△

◎：過半数以上が同意、○：過半数未満程度の同意、△：1名のみ、空欄：0名

特に、初等教育の段階に中途退学が起きている男子の場合、本人の就学意欲が低下することで中途退学がおきていることが、主に新モユ村男子グループの語りから考察することができた。就学意欲を削ぐ要因としては、「教科学習でのつまずき」、「教師等への恐れ」、「学校生活や寮生活との不適應」、「生活実態に合っていないカリキュラム」、「落第に対する恥ずかしさ」の5つが挙げられる。

①教科学習でのつまずき

教科学習でのつまずきについては、B村(男)のグループが最も多く、A村(女)、B村(女)の2グループも一部語りが見られた。

“3年生まではどうにか勉強したけど、もうさあ、いいやっておもっちゃって。4年生にはならなかった。”(B村Iさん 男)

“もう勉強とか面倒くさいし、算数とかわけわかんないだろ！だからやめようって思って。もう行きたくないなあーって。”(B村Iさん 男)

“小学校の1年間だけは学校に行ったけど、勉強するのが嫌になっちゃって。2年生に進級するときに学校をやめて家に帰ってきたよ。”(B村Kさん 男)

“勉強が難しくなってきた。次第に学校に行く日も少なくなってきた。3年生までは行っていたけどね”(A村Eさん 女)

“落第した教科は数学と理科の2教科で。理数系がどうしてもできなくて。10年生まで頑張ったからちょっと、実家に戻ろうかなって思ったの。”(B村Lさん 女)

②教師等への恐れ

教師等への恐れは、B村(男)グループで見られた。

“もう、授業中さあ、眠くって眠くって(笑)。授業が始まると、ウトウトしてきてさあ、もう寝ないのに必死だったんだけど、寝たら先生怒るしさあ。”(B村Iさん 男)

③学校生活や寮生活への不適應

寮生活への不適應は、B村(男)(女)グループで見られた。

“最初に、寮に入ったのだけど、その時に寮のルールが厳しいし、家族と離れ離れになるのも寂しかったし。学校に行く気がなくなっちゃったんだよね。”(B村Hさん 男)

“学校に行くと頭が痛くなったり、おなかが痛くなったりするようになってきちゃって。それで、先生とかがお父さんと呼んで私を村に連れて帰ったの。そしたら、元気になって。でも、学校に行ったらね、また病気になるって。”(B村Mさん 女)

④生活実態に合っていないカリキュラム

生活実態に合っていないカリキュラムについては、B村(男)グループで見られた。先述した

ように、モユ村はクラマー教徒が多く、本調査においても4人中3人がクラマー教徒であった。バングラデシュでは初等教育から宗教の授業があり、児童生徒の信仰している宗教を学ぶことになっている。しかし、クラマー教徒の教科書は存在しないため、学校の大多数を占める仏教を授業で学んでいる。

“だってさあ、トンチョンガ民族⁴の人が多からさあ、仏教の勉強をしないといけなかったんだ。だからね、クラマーのさあ、教科書ってなくてさ。だから、自分の宗教を勉強できないから、全然わかんないのを勉強しないといけないから、難しくって。結構大変だったなあ。”
(B村Iさん 男)

⑤落第に対する恥ずかしさ

落第に対する恥ずかしさは、B村の(女)グループで見られた。

“10年生までモノゴール⁵にいたのだけど。数学と理科の進級試験が不合格だったから、もう11年生にはあがらずに村に帰ってこようと思って。もう1年モノゴールで10年生するのも恥ずかしいし。”(B村Lさん 女)

このような発言から、子どもが勉強へのつまずきを少しでも覚えてしまった際に、就学意欲が低下し、実際に中途退学してしまっている実態が分かる。今後教員らに対しても調査を行ってみたい点ではあるが、子どもが授業につまずいた際に励ましたり、フォローアップをしたりする役割を担う人材が学校現場に不足しているのではないかと考えられる。

Lさんのように留年も大きな要因となることが考えられる。留年した場合は、同じ学年にもう一度就学しなければならず、それを恥ずかしいと感じ中途退学につながっていることが分かる。

また、Hさんや、Mさんのように、寮や学校に対する恐怖感や不安感から非就学や中途退学につながるケースがある。多くのクミ民族の子供は、村内や近隣の村に学校がないことから、寮生活を余儀なくされるため、生活面においても初等教育段階では不安感を持ちやすいのではないかと考えられる。

(2) 周囲の就学に対する低い意識

(重要アイテム数35：A村(男)3・(女)10、B村(男)13・(女)9)

父親(祖父)の就学に対する低い意識は、「不就学・中途退学を容認する姿勢」、「就学よりも仕事や家事を重視する」、「就学・再就学への不理解」の、3つが挙げられる。

①不就学・中途退学を容認する姿勢、②就学よりも仕事や家事を重視する

①の不就学・中途退学を容認する姿勢、②の就学よりも仕事や家事を重視するは、重なる語りが多かったため、まとめて提示する。①は、A村(男)(女)、B村(男)のグループで見られた。②は、A村(女)、B村(男)(女)のグループで見られた。

“うちは全然(爆笑)怒られるわけがないじゃん～。辞めたい！やめる！もう行かないって言ったら、父さんが「そうか！なら明日から焼き畑に行け。」って。俺が今焼き畑手伝っているから、

家族は助かっているし。家だってどうやって建ててるかも知っているし。兄さんは学校行っているから、家なんか作れないんだぜ。”(B村 Iさん 男)

“僕の家もそうだねえ。父さんに「もう勉強しない！学校は行かない」って言ったら、「じゃあ、家にいなさい」って。それから、僕も焼き畑したり、木を切ったりしたなあ。父さんは、勉強は自分がやりたくないと思ったらもういいって言ったんだよ。母さんも父さんの決定に賛成だったと思うよ。”(B村Jさん 男)

“僕はさあ、じいちゃんに言った。親にも言ったけど。じいちゃんにもう行かないって。学校楽しいと思わないって言ったら、みんなと同じように「じゃあ、焼き畑しなさい」って。それから、焼き畑の仕方とか、竹細工とか、バザールでどうやって売るかとか値切りの仕方とか覚えてたんだよ。”(B村Kさん 男)

“今、他のきょうだいみんなは、寮に住んでいるから私がおうちの手伝いは全部しているよ。料理も、洗濯も、家畜の世話も、機織りも。機織りは勉強している人にはできないしねえ。”(B村Nさん 女)

③就学・再就学への不理解

就学・再就学への不理解はA村(女)、B村(女)グループで見られた。

“お母さんに、もう一回学校に行きたいなって、伝えたのだけど。焼き畑もあるし、妹もいるし面倒見ないといけないからダメって。”(B村Mさん 女)

このような発言から、父親や祖父が、子どもが学校を辞めたいと感じた場合にその意見を尊重してしまっていることが分かる。要因(1)の本人の就学意欲の低下に関連する点であるが、男子の場合就学をやめたいとの発言をした際に、父親が中途退学することを止めず、その意見を尊重してしまっていることが分かった。インタビュー対象者で中途退学した者は、最終的に中途退学を決定する人を尋ねた際に、全員父親あるいは祖父、父親が亡くなっている場合は母親ではなく兄と答えていた。

就学を辞めて、焼き畑農業に従事するようになってからは、男子は主に竹で籠や家の作り方や、バザールでの売り買いの仕方を学ぶ。女子は主に機織りを学ぶ。そのため、就学を辞めた場合にも様々な技術を取得するため、就学している者よりも出来ることもあり、中途退学や非就学であることを肯定するような語りも見られた。

男子に比べて女子の場合には、就学させることに対しての父親の意識が低いことが分かる。女子では、就学に対して父親に意見を述べることは難しいと感じる場合が多く、学齢期に就学していない場合には、家事手伝いや焼き畑農業での労働力として期待されている実態がある。

就学に対する意識は、両親からの聞き取り調査等を行っていないため詳細は不明であるが、両親の就学経験がない世帯においては、学校教育に対するイメージを持つことが困難であり、子どもは就学するために家を出て寮暮らしをしているため、子どもが学校の何に不満があり、どのような点で学校に行きたくなるのかを想像することが難しいのではないのかと考えられる。

また先述した張(2008)の指摘にもあるように、教育が社会経済地位を達成する手段であることに対する認識が欠けているため、非就学が起きている点も見逃せない。これと同様の状況がク

ミの村落にもあり、教育を子どもに受けさせることよりも、食料の確保や現金収入確保のために焼き畑農業に従事させている世帯もまだ多く存在することが分かった。

(3) 経済的要因

(重要アイテム数34：A村(男)21・(女)8、B村(男)0・(女)5)

経済的要因は、「家庭の経済事情への考慮」、「他のきょうだいに対する考慮」、「親の死」、という3つが挙げられる。

① 家庭の経済事情への考慮

家庭の経済事情への考慮は、A村(男)(女)、B村(女)グループから見られた。

“ルマ市内の学校で中学校卒業まで過ごしました。高校進学は金銭面で厳しくて断念して、実家に戻って焼き畑をして2014年に結婚しました。今年からまた高校に通いHSC⁶に合格するように頑張っています。”(A村Bさん 男)

② 他のきょうだいに対する考慮

他のきょうだいに対する考慮は、A村(男)(女)、B村(女)グループから見られた。

“学校行きたいとは、長男だし言えなかったですね。弟が学校に行くことが決まった時は、いいなとは思いましたが、その時もう僕は結構大きくなっていましたから。家の手伝いするのが自然だと思っていました。”(A村Aさん 男)

“9年生に上がる時、考えました。僕は長男だし。きょうだいはたくさんいるし、他のきょうだいが学校を辞めるのだったら、僕が辞めようかなと思って。”(A村Dさん 男)

“きょうだいも多いし、女の子で勉強させてもらっているきょうだいはいなかったから。中学校に行きたいとは言えなかったなあ。お父さんにそんなこと伝えるのは怖いしね(笑)。”(A村Gさん 女)

“学校に行ってみたって、言いたかったけど。でも、きょうだいの面倒見てあげないとけないって思っていたから。仕方ないのかなって。”(B村Nさん 女)

③ 親の死

親の死は、新モユ村(男)(女)グループから1名ずつ見られた。

“ちょうど小学校5年生の年にお母さんが亡くなって。それで、家も焼き畑も忙しくなって。中学校に行きたいってお父さんに言うのができませんでした。これからの生活をどうしようって考えていたと思うし。妹もちょうど僕と同じ感じで、お母さんが亡くなってから学校をやめています。”(A村Cさん 男)

“お父さんも2年前に亡くなっているし。家の経済状況が良くないこともわかってたし。モ

ノゴールは寮費も高いからね。もう一回学校に戻ったらHSCまでは勉強するかな。高校卒業ぐらいまでって今は考えているよ” (B村Lさん 女)

経済的要因は、不就学や中途退学を決定づける大きな問題であることが先行研究からも明らかになっているが、本調査においてもその傾向が同様にみられた。不就学に関しては、子どもが学齢期になっても、就学させることができないといった結果となっている。

中途退学の場合は、ロンタン村男子グループに顕著であったが、中等教育就学年齢以上になると家庭の経済事情をある程度理解し、きょうだいのことを考えたりなどすることで自分から中途退学している様子が分かった。女子グループからは両村に共通して、自分は女だから男きょうだいが優先されているのは仕方がないといった意見や、家事や弟妹に対する世話をしなければならぬといった意見があった。中にはBさんのように一度就学をやめ、再度就学に戻るというケースや、Lさんのように再度就学する意欲を持っているケースも見られた。

5. 総合考察

本稿では、非就学や中途退学が引き起こされている要因をFGIの語りから分析し、本人の就学意欲、親の非就学及び中途退学を容認する姿勢、経済的要因が挙げられることが分かった。重要アイテム数は、経済的要因が34回と最も多かった。しかし、これらは村ごと、男女ごとによってばらつきがみられた。

グループごとの特徴としては表2にもまとめたように、A村男子グループでは、経済的要因を挙げる意見が多く、中途退学をしているケースが目立った。しかし、この結果は、FGIにおいては他者の意見に引きずられることもあり、教科へのつまづき等の側面からの意見が言いにくくなってしまっていたとも、推測できる。

一方、B村男子グループにおいては初等教育段階における中途退学のケースが目立った。中途退学者3名は全員授業のつまづきが主なきっかけとなって、中途退学に至っていることが明らかになった。加えて、保護者も子どもが学校をやめるという決断をした際に、焼き畑農業に従事すればよいといった返答をしており、実際に焼き畑農業に従事することで、僅かな現金収入を得て生計を立てることが可能であるため就学することに絶対的な意義を見出していないことが分かる。しかし、インタビューの中で、結婚して子どもがいるJさんに対して、将来自分の子どもが学校を辞めると言い出したらなんと声をかけるのかを尋ねたところ、「学校を続けるように言う」とコメントしており、教育を受けることが無意味であるとは考えていないことが分かった。

女子の場合は、非就学の確率が高い。主に世帯主である父親が女兒に対する教育を受けさせる意識が未だに低く、男児を優先させている現状が分かった。これは、村内の女性で現金収入を得ているものが多くの場合存在せず⁷、ロールモデルとなる実例が身近にないためではないかと考えられる。これは、田中・加野(2018a)によるクミ民族村落3村での世帯主に対する悉皆調査でも明らかになっている点であり、女兒に教育を受けさせるメリットが自分の世帯にとって見だせていないことが、女子の就学率が低くなっている背景にあると思われる。

また、A村とB村を比較すると、就学に対する意識はバンドルバン市内との距離が影響していると考えられる。A村はバンドルバン市内へのアクセスもほかの村と比べて良く、市内やほかの民族、ベンガル人等の生活を知る機会も多くある。そのため、教育が社会・経済的地位を達成する手段であることを知っており、焼き畑農業だけではなく将来の生計の立て方を子どもにさせたいという意識があるのではないかと推測することができる。

6. 本研究の限界と問題点

本調査は、一部の地域の限られた人数の対象者によるニーズ調査の結果であるため、調査の妥当性を数値的に評価することは困難であり、クミ民族全体を明らかにすることはできない点に限界がある。今後は量的研究を組み合わせるなどのさらなる検討が必要となってくるだろう。

また、子どもだけでなくその両親や、学校関係者等にも同様に調査を実施し、多角的な視点から要因分析を行っていきたい。

(注)

- ¹ モンゴロイド系の11民族(チャクマ・マルマ・トリブラ・トンチョンガ・ボン・ルシャイ・パンクワ・キャン・チャック・ムロ・クミ)、約50万人が暮らしている。この11民族を総称しジュマ(Jumma:ベンガル語で焼き畑をする人々)という名称は、民族意識を高めるために80年代頃につくられた造語である。しかし、この総称が使われるようになった歴史は浅く、11のすべての少数民族が自らをジュマと思っているわけではなく、どちらかと言えばそれぞれの民族名で呼ばれることを望む。また、古くからは「バハリ(山の民)」という総称が使われており筆者がフィールドワークを実施する最中はこの総称を少数民族自らが使用している場合が多くみられた。
- ² チッタゴン丘陵地帯における少数民族の中で一番人口が多いのはチャクマ民族であり、500,751人中239,417人と、47.8%を占めている。マルマ民族は二番目に人口が多く、142,334人と28.4%を占めている。
- ³ Para-schoolは、バンドルバン県の108の村落に設置されており(バンドルバン県の村落数は1558村)、現在19,732人の子どもが就学前教育を受けている。
- ⁴ 人口は19,211人。主に仏教徒である。
- ⁵ チッタゴン丘陵地帯ランガマティ県ランガマティ市内にある少数民族のための寄宿舎学校を運営するNGO。1975年にチャクマのお坊さんによって設立された。チッタゴン丘陵地帯系の少数民族コミュニティの中で中心的な役割を担っている。
- ⁶ 後期中等教育終了試験(Higher Secondary Certificate: HSC)
- ⁷ クミ民族の女性で、現金収入を得ているのは2名のみである。1名は、軍隊に所属しており、もう1名は新モユ村のpara-schoolの教師である。

【引用・参考文献】

- 岩山絵理(2017)「ウガンダにおける障害児とその家庭への援助活動に向けた障害児を養育する家庭のニーズに関する研究:保護者に対するグループインタビューからの考察」愛知淑徳大学論集, 福祉貢献学部篇(7), pp.59-66
- 小川未空(2016)「ケニア農村部における中等学校への就学・退学をめぐる家族の戦略:就学継続の意味づけに着目して」『国際教育協力論集』19巻(1), pp.75-87
- 日下部達哉(2007)『バングラデシュ農村の初等教育制度受容』東信堂
- 下澤嶽(2012)『バングラデシュ、チッタゴン丘陵で何が起きているか』ジュマ・ネット
- ジュマ・ネット(2007)『チッタゴン丘陵白書 バングラデシュ・チッタゴン丘陵地帯の先住民族紛争・人権・内紛・土地問題2003~2006』
- ジュマ・ネット(2015)『チッタゴン丘陵白書 バングラデシュ・チッタゴン丘陵地帯の先住民族紛争・人権・内紛・土地問題2007~2013』
- 田中志歩・加野芳正(2018a)「バングラデシュの少数民族の教育制度受容に関する考察—クミ民族を中心として—」、『香川大学教育学部研究報告』第1部第149号, pp.1-14
- 田中志歩・加野芳正(2018b)「バングラデシュ・チッタゴン丘陵地帯の少数民族における学校選択に関する考

- 察—チャクマ民族を中心として』『香川大学教育学部研究報告』第1部第150号、pp.1-12
- 田中志歩 (2018) 「バングラデシュ小規模少数民族クミにおける学校教育中退学者及び非就学者の現状とその要因—バンドルボン県ロワンチョリ郡の事例—」『国際開発学会第29回全国大会発表論文集』、筑波大学2018年11月23日・24日、国際開発学会、p152
- 谷口京子 (2017) 「マラウイ農村部の小学校における退学要因」『広島大学教育開発国際協力研究センター国際教育協力論集』20(1)、pp.1-15
- 張瓊華 (2008) 「中国農村貧困地域における義務教育の現状：学齢児童の就学状況を中心に」『国際基督教大学学報』I-A 教育研究 50, 177-187
- 張瓊華 (2009) 「中国貧困地域における貧困と教育に関する考察：4つの貧困県の比較から」『国際基督教大学学報』I-A 教育研究 51, 115-124
- 土屋雅子 (2016) 『テーマティック・アナリシス法』ナカニシヤ出版
- 松井剛太・七木田敦 (2015) 「障害のある子どもをもつ母親と父親の子育て意識に関する比較研究：フォーカス・グループ・インタビューによる質的分析」『幼年教育研究年報』第37巻、pp99-106
- 水ノ上智邦 (2003) 「途上国家計における就学の決定：インドネシアのデータを用いて」『経済學論叢』54(4)、pp.931-953
- 安梅勅江 (2001) 『ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法：科学的根拠に基づく質的研究法の展開』医歯薬出版株式会社
- 安梅勅江 (2010) 『ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法Ⅲ／論文作成編：科学的根拠に基づく質的研究法の展開』医歯薬出版株式会社
- Chittagong Hill Tracts Development Facility UNDP Bangladesh (CHTDF-UNDP). 2009. SOCIO-ECONOMIC BASELINE SURVEY OF CHITTAGONG HILL TRACTS. Chittagong Hill Tracts Development Facility UNDP Bangladesh (CHTDF-UNDP)
- Integrated Community Development Project (ICDP). 2016.
- SEHD (2017) 『শুধি』 SEHD
- UNESCO (2015). EFA Global Monitoring Report 2015; Education for All 2000-2015: Achievements and Challenges. Paris: UNESCO.
- Zabarang Kalyan Samity (2014) 『grassroots voice The situation of primary education in the Chittagong Hill Tracts of Bangladesh』Zabarang Kalyan Samity

【謝辞】

現地調査に協力して下さった、クミ民族の方々に心より御礼申し上げます。KONPLAY (コンプライ：クミ語でありがとう)。本稿は、国際開発学会第29回全国大会で田中が発表したものに加筆・修正したものです。ご意見、コメントを下さった出席者の皆様、紀要論文にまとめる際に助言して下さった小方朋子先生、松井剛太先生に感謝を申し上げます。

また、本研究は日本科学協会の「2018年度笹川科学助成」による研究成果の一部であります。

付記 本論文は田中志歩が単独で執筆し、加野芳正が監修したものである。